

日本の企業、業種では、諸外国に比べて世襲で経営者の交代が行われることがこれまで多くみられてきた。中小企業はもとより、大企業でもいまだに世襲による同族経営されている企業は決して珍しくない。医療業界、とくに個人診療所においてはその傾向はさらに強まる。大先生の跡取りとして若先生が後を継ぐのがこれまであたり前の姿であったが、近年の医学部入試の難化、職業としての医師の魅力低下、社会的地位の低下などの要因によって後継者のいない診療所が近年急速に増えてきている。

厚生労働省の統計調査によると、全国の病院数はこの10年間ほぼ横ばいであるが、廃業または休止に至る診療所数は年間7677件に上り、この20年間で約2倍に増加している。地域別では北海道、東北、関東甲信越において後継者不在率は約90%と高くなっている。また民間調査によると、医療機関において既に後継者を決めているケースでは後継者が非親族である割合は12.4%にのぼり、M & Aなどの第三者継承を選択肢に入れている医療機関が増えてきている。また生活の場などの理由で、こどもが医師になっても親の診療所を継承しないケースも

論壇

医業継承問題を考える

茨城県保険医協会副会長 高橋 秀夫

増えてきている。診療を通して院長が長年築き上げてきた患者さんとの信頼関係が、閉院と言う形で瞬時に消え失せてしまうのはあまりに切ないことである。

将来なりたい職業ランキングでも小学生男子において医師は第3位であるが、高校生男子になるとユーチューバーに抜かれて医師は10位以降の圏外になっている。ちなみ高校生女子において看護師は2位と今でも健闘している。こどもたちにとって医師という職業はこれほど夢も魅力もない職業になってしまったかと思うと残念至極である。

政治家も医師と同じように「先生」と呼ばれる職業である。以前ほどではないのかもしれないが、医師と違い、政治家には世襲の二世、三世議員が今でも多いようである。選挙の地盤をそのまま引き継ぐなど、世襲の方がスムーズに世代交代がなされるなどの背景があるのだろう。私事で恐縮であるが、我が家の患息に医学部合格の知らせが届き、「オヤジの後を継ぐから」と言ってくれた時、思わず笑顔の中に涙がこぼれ落ちた。親の背中をみてくれていたと思えたこの瞬間が一生の思い出になっている自分はもはや昔人間なのかもしれない。